

U05a 光子＝「始粒の交互配列二重鎖構造・自力走行体」のモデルで考える光子の屈折・反射・干渉挙動

藤原 ケイ

筆者は 2020 秋の本大会で 太陽黒点、光子の屈折挙動および物性値の特徴などの研究・考察から新たな 物質（電子、陽子、中性子）、光子、ニュートリノ（反物質含む）のモデルを提案して紹介した。ここから言える事の一つに 光子モデルが妥当なものとすると、ハッブルの法則の解釈見直しが必然となる、点がある。具体的には、光子には寿命があることになり、時間とともに光子は減衰する。すなわち赤方偏移の大部分が光子の年齢となる。言い方を変えると 遠くから届く光子は赤方偏移しているということであり、赤方偏移の多くは距離そのものとなり、光ドップラー効果の割合は小さく、宇宙論的效果等は不要となる。

物質、光子、ニュートリノ等のモデルを再確認し、具体的な物理現象を取り上げてモデルの妥当性を考えて見たい。今回は 光子の屈折・反射・干渉現象を取り上げる。

*今回は主に光子についてなので、モデルの全体概要を示す。

- (1) 原流体が存在する。〈光子の速度抵抗となる”何か”があるはずである〉
- (2) ±の始粒が生成し、直ぐ消える。〈原流体＝”何か” から最初に生成するもの〉
- (3) 物質、光子、ニュートリノ、各中間子及びこれらの反物質は”始粒の動的構造体”であり、安定構造のものが物質、不安定なものが中間子で、光子・ニュートリノは末端が破裂して徐々に短くなる準安定の存在である。
- (4) 物質等（元素を含む）の全ての物性、重力などの全ての作用、場・運動・状態等は 物質等及びその集合体から発現する現象であり、原流体・始粒・物質等が混合した存在状態である。